

# 雑俳的俳諧の参考書『名所山水辺居所人倫支躰』

塩村耕

## 解題

蕉風を是とする俳諧観から見れば、邪道とされるに違いない。珍奇な話題を好んで取り上げた俳諧辞書である。例を挙げると、

婆雪隠 駿河御城内に有り。老女の妖物出る故、かく云とぞ。

不転橋 総州にあり。此橋にてころぶ者は、其年の内に死するやうに云ひならはし、祝して一舂食喰ふと也。

溜住居 江戸に有。世間の悪たれ者、多く集り居る所を云。乞食小屋也。無藝のやくざ者、願人坊主杯也。外道波 六月廿八九日に極て立、大波也。遠州辺に有ると也。

馬聖 こも僧の事を云。馬は尺八を聞て余念なき物也。仍かく云。

順礼 順礼を云。皆棒を持者故、此異名有。

笋姥 江戸堺町、歌舞妓子を抱へて金を借しける也。

猫先生 江戸の人。儒者也。猫を多く飼て愛せし人とぞ。

三屋の馬鹿 た、き金を持ってかけまはる者也。足早成ることに喩る道具也。ありく事、極て早足なり。

干鱈先生 大儒也。常住の食事に干鱈を好んで喰ふ故、此の名有り。

如來手 碁をうつ時の手つきを云

こんな具合で、興味深い当世語彙に満ちている。實在の儒者のあだ名と思しい「猫先生」や「干鱈先生」など、竹皮草履を自ら拵えて生活の資としたために、世人から「皮履

先生」と呼ばれた中根東里のことが連想される。

三河西尾近郊の寺津村（西尾市寺津町）にある寺津八幡宮の神主で国学者、渡辺政香（一七七六—一八四〇）が、文政六年に公開図書館として神社に附設した文庫は、西尾市岩瀬文庫の原点といふべき存在で、そこにあつた書籍は岩瀬文庫に吸収収蔵されている。その中に雑多な資料群を十七冊に合綴したものが、「政香雜録」として一括されていた（昔の岩瀬文庫による合綴）。我々のデータベースでは、そういった一括資料も一点一点解きほぐして書誌記述をしている。その第十一冊目に合綴された中の第七冊に本書はあつた。普通には、その存在に気づきがない資料である。

略書誌を示すと、写本大本一冊（二十四・五×十六・五糎）。共紙表紙前後各一丁、本文は全二十九丁。原表紙の左肩に書外題「名所山水辺居所人倫支牀」。外題は後筆と見られるが、外に原書名をうかがう手がかりはなく、仮にこれを書名としておく（以下「名所山水辺」と略称）。序跋や輿書等はない。近世前期から中期にかけての書写。

内容は、俳諧に用いられる奇異な語彙を挙げ、下段に簡略な注記を施した俳諧辞書である。全体を「名所古跡山類水辺居所所用」「人倫并古事」「支牀」に部類する。語彙は当代性と卑俗さが著しく、雑俳ないし雑俳的な俳諧の参考に供されたものと思われる。語彙選択の面白さは際立つ

ており、稀少資料として翻刻紹介すべきと考えた所以である。

まず内容に基づき、成立について推定を試みたい。人倫の部の末に「関四郎 去る関白の御子也。男伊達を好み玉いし人也。故に関四郎と呼し也。松平紀伊守殿ノ諸司代ノ時分也」との記事がある。松平紀伊守は丹波篠山藩主の松平信庸のことで、京都所司代を務めたのは元禄十年より正徳四年となる。この一件は、尾張藩士、奥村徳義の旧蔵で、岩瀬文庫現蔵の写本『人品伝記』にも記事が載る。また奥村徳義による随筆『松涛棹筆』<sup>（注1）</sup>では『視聽実記』より同じ記事を引いており、引用元の正体が知られる。実は岩瀬の『人品伝記』も『視聽実記』の抄写本なのであつた。ところで、『視聽実記』のことはあまり知られていないかもしれないが、注目すべき重要資料なので、ここで少し寄り道をして言及しておきたい。

『視聽実記』は、近世初頭より中期まで、尾張藩に関する重要な、あるいは珍奇な事件を分類して列挙した記録書である。もちろん写本で全六巻。伝本は、まず鶴舞中央図書館蔵の名古屋市史資料五冊本がある<sup>（注2）</sup>。これは宝暦八年に書写した本を、天保十三年に書写した名古屋市東区長堀町（当時）、首藤氏蔵本を、明治四十三年に書写した本である。また東北大学狩野文庫蔵の近世後期書写六冊本がある。右両本はほぼ同内容で比較的善本と見られる。外

に鶴舞中央図書館に近世後期書写の七冊本がある。小寺玉晁の旧蔵書。こちらは、未精査ながら、記事の省略と後年の増補とが見られる。また、蓬左文庫に名古屋市立図書館蔵（つまり鶴舞中央図書館現蔵）の七冊本を昭和八年に書写した本がある（古典籍総合目録データベースには六巻五冊とあるが、現状では二冊目以下の所在不明）。

東北大本により各冊の部類を示すと、第一冊は吉祥、新令（起原、諸省）、雑、第二冊は人品（伝記、行状）、第三冊は刃傷、立退（逐電）、第四冊は死刑（磔、梟首、斬罪、火炙）、追放（附、改易、御暇、遠嶋）、第五冊は自殺、乱心、変死（闇討、溺死、弑逆、自傷、殃死、縊死）、妖災不祥（水、旱、疾、疫、地震、風、雷、火）、第六冊は閉門（逼塞、御叱、過料、塾居）、御預、切腹、怪異、姪醜（附、男色、姪死、切女）となり、その興味深い内容が知られよう。第五冊に「同（享保）三戊七月廿六日未半、大地震」（以下同書よりの引用は東北大本による）とあるのが、書中最新の記事らしい。

注目すべきは、記述に憚りの意識が全く見られない点である。たとえば、第二冊「靈仙院様、痴に近しと」（靈仙院は徳川家光の長女で、尾張藩第二代徳川光友の正室千代姫）、第六冊「本寿院様、始北隣の田嶋新兵衛に通じ出奔、後に共に帰る。常に連子に上り男を視て単嶋、又は文なんどを通じ、荒姪也。御成の年、田嶋下りしに、隣家の者と

て寿院へ御呼、御料理被下」（本寿院は第三代徳川綱誠の側室で、第四代吉通の生母）といった具合である。したがって、江戸期の記録書には珍しく、内情にまで立ち至った、価値の高い記述が多い。

本書の編著者は従来不明とされているようである。ところが、第四冊に次の記述があった。「同（万治四年）四月十九日、熱田円通寺孤舟（禪）遠嶋／飯綱執行、仰渡しは塵点七十六に見ゆ」。この「塵点」こそは膨大な雑記随筆『塵点録』<sup>注3</sup>を指すに違いなく、その編著者は朝日重章とされている。つまり『視聴実記』の編著者は、かの『鸚鵡籠中記』の朝日重章と見られる。朝日は享保三年九月に四十五歳で亡くなっており、書中最新の記事が享保三年七月であることと矛盾しない。死の寸前まで筆記を続けていたらしい。何よりも記事選択の好みも憚りのない記述も、『鸚鵡籠中記』のそれと完全に重なっている。

話を戻して、『名所山水辺』に見える関白の一件について、『視聴実記』第二冊に、

一、貞享二丑の盆にや、関白殿は関四郎左衛門、西門跡は西門平と替名被致、四条河原にて浮気おどりし、門平あたまを被切と云々。此事に付、四条河原の水茶屋闕所、門跡隠居とも、或云其俣にて被居とも云。

とある。『名所山水辺』には松平紀伊守時代とあったが、

ここでは貞享二年の盆に起きた実話としている。

また『名所山水辺』人倫の部に、

馬糞先生 儒者也。元は有徳の人成しが、弟に世を譲て、常に馬糞をかきて歩行ながら書をよみ玉ふ。故に此名有。句に、賢人酒呑む馬糞先生。

という、これまた興味深い記事がある。右に引用される付句など、この説明を見なければ、全く意味不明のところである。この馬糞先生について、細井広沢による随筆『続大八録』<sup>〔注4〕</sup>に次の記事のあることに気づいた。

武府に三十年前、市谷郷尾侯の邸のうしろに大なる榎の木有、古木にて其根下、洞のごとく也。一人、其中に住る事数年なり。身には襤褸を着て、楞一、籃二あり。日出る比おき出て、路上に歩いて牛馬の糞を拾ふ。籃に満る頃、四谷と云所の民家と又官家の小吏のもととに隔日に至りて、牛通馬矢をうる。あたひ八錢也。そのかへるさに米うる所に至りて、腰より小さき罐子出して水を乞ひ、水を索て、かの米を煮熟して罐ながら口に傾入て水のみ、一笑して又樹下の洞に入。日暖なる時、洞前に出て独語す。小児集り伴ふ。大人とは敢て一言を通ぜず。小児にも書て贈らんと云程に、紙筆を具すれば、手うるはしく書く。古文古歌、村閭の拳子の流にあらず。かくて其所に終りぬ。後に聞ば、故の政府板倉内膳正の小臣也。微禄を弟に譲りて斯成

て待る也。いかなるにか。

江戸のディオゲネスは確かに実在し、広沢先生の興味をいなく刺激したらしく、詳しく記述してくれている。同書の成立は享保初年頃で、「三十年前」は元禄の初年頃に相当する。

ちなみに馬糞先生は、『視聽雜記』第一冊にも登場し、名古屋にまでその名が轟いていたらしい。

一、江戸にて馬糞計を拾ひ、食をつなぐ者有。金銀錢等を与れども不取、物をも不云。馬ぐそ賢人と云。とある。よりそつけない記述ながら、こちらは「賢人」を冠しており、「賢人酒呑む馬糞先生」の句の由来がよりわかるとともに、世人のこの人物に向けるまなざしの暖かさを知る。それにしても、わずかな例とはいえ、傑出した浮世の観察者で記述者、朝日重章と記述が重なっている点に、『名所山水辺』編著者と細井広沢との優れた資質を見るような気がする。

さて、注目されるのは、『名所山水辺』の中で唯一箇所、「能目鏡山」の項に「灯心もがな能目鏡の山霞 寿角」と、句の作例が作者の実名入りで記されている。寿角は江戸の俳人、立羽寿角のことである。有名な不角の次男で、享保から宝暦にかけて活動した人物。

以上を勘案するに、概ね享保年間頃の成立で、江戸の話題が比較的多く、寿角の名を挙げる点から見ても、この頃

に関東で盛行した不角系の俳諧に心を寄せる人による編纂と見て誤らないであろう。

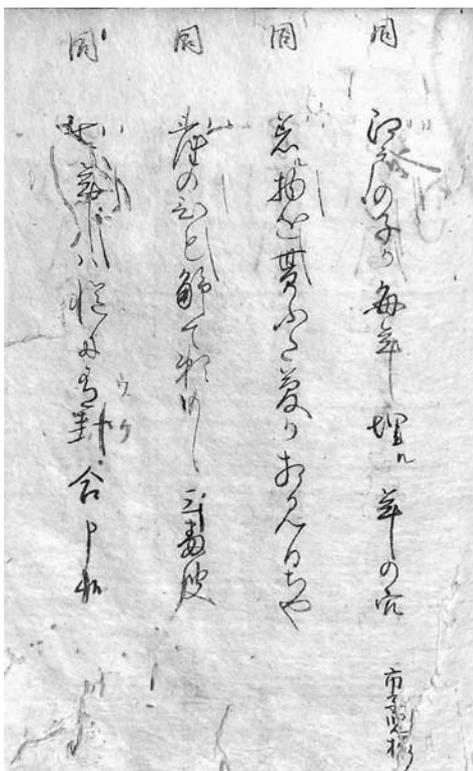
ところで、なぜこのような都会風そのものともいえるべき書物が、三河の辺隅にある寺津八幡宮に伝来したのであるうか。詳しい事情は不明ながら、岩瀬文庫本の全資料調査をほぼ終えた現時点では、おぼろげながら見えてくるものがある。岩瀬文庫本の中から、これに関連すると見られる資料が三点出現しているからである。

①『団人点雑俳点取集(仮題)』(函架番号、65函ホ22号)。写本半紙本一冊。渡辺旧蔵書。三河寺津村兎月連の作者の雑俳句(前句付・笠付・折句等)に団人が点を付した点取集である。見返に「子十二月五日切(丑正月/廿八日披)入花十穴/句題あり、省略/三陽雲母莊団人点(会林)白花堂」の引札刷物を貼付し、奥書には「(寺津村)兎月連/団人雅丈」との墨書がある。白花堂団人は三河吉良の点者で、宝暦八年刊『俳諧』笠の華』の編著のあることが知られる。本書もおおよそ同じ頃の成立と見られる。

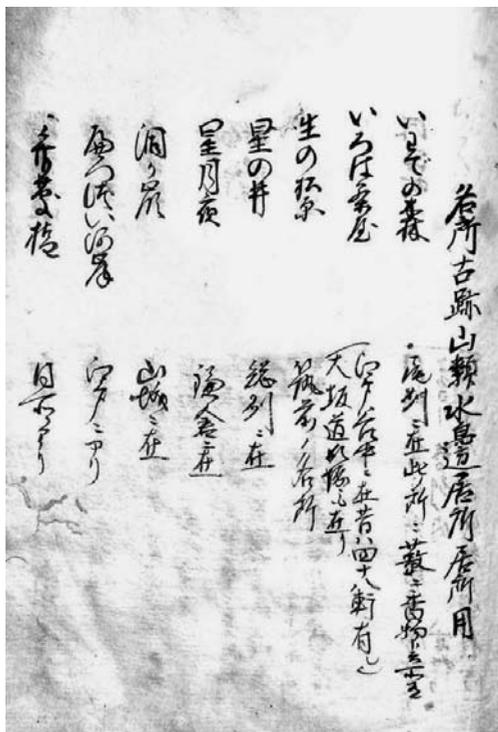
②『奉納会勝句刷(仮題)』(函架番号、丑函144号)。版本特大横本一冊(もとは半紙本横本の袋綴の丁を開いて、紙を重ねて右端を綴じる)。蔵書印等がなく、渡辺旧蔵書とは確定できないが、その可能性が高い。宝暦年間に三河で行われた雑俳勝句刷十六点を合綴した珍資料。

③『梅の臚』(函架番号、渡辺追加56)。写本中本一冊。渡辺旧蔵書。明和八年二月八日、六十歳で病没した三河俳人、鯛坊五哉の追善俳諧集。鯛坊は中村氏で、もと土井侯時代(西尾藩主土井家は延享四年二月に三河刈谷に転封)の西尾藩に仕えたが、致仕して東吉良の友国村(西尾市吉良町友国)の山林に隠棲した。この人こそ団人とも号して、雑俳の点者をもしていた人物である。

まず②を見ると、寺津村の兎月堂ないし兎月という作者がしばしば入集しており、この兎月が①の兎月連の中心人物と見られる。詳細は不明ながら、渡辺家の当主ないし家族であった可能性がある。①を清書した人物もこの人と見て自然である。そして、①と『名所山水辺』とは筆跡が似通っているように思われる(図版1~2参照、「江戸」の文字などよく似ている)。すなわち、奇書『名所山水辺』は意外にも三河で作られた書物であるとわかる。同書の存在は、この地に既に進取の気風ある書物文化が、既にこの地にあったことを物語っているように思われる。



図版2 『同人点雑俳点取集』



図版1 『名所山水辺居所人倫支鉢』

\*注1 『松涛棹筆』（抄録）は『名古屋叢書三編』十

巻所収（百三十六頁）。ちなみに、奥村徳義（得義）の旧蔵書は、まとまって岩瀬文庫に所蔵されている。同文庫書誌データベース参照。

\*注2 『視聽実記』の鶴舞中央図書館蔵五冊本と七冊本とは、何れも名古屋市図書館デジタルアーカイブ「なごやコレクション」のサイトから見ることができるとがである。

\*注3 『塵点録』は鶴舞中央図書館に六十九巻本に基づき、明治四十五年抄写二十三冊本と、三十三冊本に基づき、明治四十三年抄写二冊本とがある（何れも名古屋市図書館デジタルアーカイブ「なごやコレクション」のサイトから見ることができるとがである）。愛知県図書館に六十九巻のうち二十三巻二十六冊分の近世中期写本がある（愛知県図書館「貴重和本网際ライブラリー」のサイトから見ることができるとがである）。外に徳川林政史研究所に七十二巻七十三冊本がある由（未見）。ただし、『視聽実記』に見える巻七十六は未発見である。

\*注4 『続大八録』は『森銑三著作集』四所収「細井広沢」に一部が引用される。その底本は当時（昭和十六年頃）三田村鳶魚の所蔵であったが、現在は所在不明。なお三田村蔵本は転写本と見られる。

## 翻刻『名所山水辺居所人倫支躰』

〔附記〕

二〇〇〇年六月に着手した西尾市岩瀬文庫の全資料調査は、既配架分については調査を了え、調査結果は記述的書誌データベースとして、文庫のサイトから既に公開している。現在は、若干残された未配架分について、細々と落ち穂拾いの調査を進めるとともに、調査中に強く印象に残った重要資料について精読を始めている。本書もそのような一冊である。

原本の表記は、カナを多用した漢字カナ・かな交じりであるが、翻刻に際し用字は、かなに統一した。通行の新字体漢字を用い、濁点・句読点を補った。訓点を施した漢文の表記の部分は、直後の（ ）内に訓点に基づくと思われる訓読を示した。

翻刻の御許可を賜った西尾市岩瀬文庫に感謝申し上げます。

### 名所古跡山類水辺居所所用

いわでの森 尾州に在。此の所に藪に香物と云所有。

いろは茶屋 江戸谷中に在。昔は四十八軒有し也。大坂道

頓堀にも在り。

生の松原 筑前の名所。

星の井 総州に在。

星月夜 鎌倉に在。

洞が嶺 山城に在。

へつつい河岸 江戸にあり。

弁慶橋 同所にあり。

御茶ノ水 江戸にあり。公儀の御水也。今は無。

橋の袂 橋の両端にある駒寄せなり。

禿の宿 高野へ上る道にあり。かるかや道心の妻の古跡あり。今は念仏堂建つ。

蝙蝠村へんぶく（「蝙蝠」に左訓「かうもり」） 丹後与謝郡真井が

原に在り。此の所、豊受大神宮、昔伊勢へ御鎮座の前は、

此の所に久しくましくくけると也。是の所より直ぐに勢

州山田外宮へ移たまふと也。

内宮町 同所に在り。是の所に内宮の御社在り。爰より勢

州の内、（四字ほど空白）へ宮移りましく、又今の宇

治の郷内宮へ移玉ふと也。

ちごく谷 有馬に有り。又江戸に有り。

銚子浦 常陸に在り。

竜門寺 大和国宇多郡にあり。

龍王が嶽をとり 山城に在る森也。

音信山をとり 総州にあり。歌の名所也。

帷子かたびらが辻 山城にあり。

甲塚 同断。

裸村 近江にあり。

餓鬼塚 総州にあり。穴成る由。

畜生塚 京。

冑の渚 朝長の冑を投げ入し渚也。

かたらいの峯 (注記なし)

四ツ足の門 山城に在り。内裏の御門也。

よもぎが洞 大内を云。

寒林 (各字の右に豎点) 唐にて死人を葬する所を云。寒

林と云ことは、極熱の時分にも、此森甚くしげりたる故、

涼しと也。

北郎 死人を葬する所を云。

尸陀林 天竺にて人の死たるを葬する所也。

玉まつ 三吉野也。

蓼が池 和泉にあり。

高間山 鶯の名所也。高間寺の内に、初陽毎朝来と鳴し桜

有。

つゞみが瀧 有馬に有。

つくへ石 くらまに有。其外、奇石多有。

つく鳥の国 筑紫の事也。木菟の形に似たる故、つくしと

云と也。

鼠の社 ひゑい山にあり。三井寺頼豪が霊を祭し也。

念仏茶屋 江戸にあり。

繩の浦 句に、秋の夕足繋る、繩の浦。

難波屋の松 泉州に在り。四方へ枝ひろがりて見事也。夫

ゆへ大名衆も折々御尋有りと也。地をはなる、事、三尺

斗にして、至極こもりたり。四五十年の内、生長すと云。

難波屋と云茶屋の庭に有よし。

涙の瀧 くらまに有り。歌に、ふきまよふ深山おろしに夢

覚めて涙もよほす瀧の音哉。

生首 (字間の左に豎点) が嶽 信濃に有り。

婆雪隠 駿河御城内に有り。老女の妖物出る故、かく云と

ぞ。

歌詰橋 山城天竜寺の北に有る石橋也。

采女馬場、采女が原とも 江戸に有。

姥が池 江戸に有り。

能目鏡山 総州二有り。句に、灯心もがな能目鏡の山霞

寿角。

鋸が嶽 信州に有り。

勧学屋 江戸池の端、錦袋円売也。

火炎山 肥前に有。火の出る山也。

釘の浦 西国に有り。

蜘蛛寺 江戸に有。

柳の宿 吉野川上に有。茶屋有とぞ。景色よしと也。

傾城が窪 江戸に有。遊所に非ず。本名、鶏声がくぼと書

く由。誹書には上の如く書く也。

源氏の瀧 山城国私市村、鴻の尾山に有り。

鯉桜 伊勢に有り。松下と云所に有り。此桜、咲ざる内は鯉とれぬと也。

\*鯉 通常はカマスであるが、魚偏に市のフグに通わせたか。

こがらしの森 するがの名所。

衣手の森 山州松の尾と嵐山の間有。

琴弾の宮 八幡の妹、玉箔の姫也。筑後の国也。

火燧河岸 江戸に有り。

不転橋 総州に有り。此橋にてころぶ者は、其年の内に死するやうに云ひならはし、祝して一舩食喰ふと也。

天王洲 江戸に有。句に、つる魚につられて居か天王洲。

手ならいの里 宇治の里に有名所也。

有常田 大和に有。

青垣山 よし野山に有り。

蟻の浦 巖嶋に有。

天の川 山城に有。全躰、白砂、帯の如く長くつゞきて、

白布の如しと也。

二星の社 同所、天の川の上みに有。星の森、孫姫の式に

筑前大鳥にも、天の川、二星の社在りと云り。

扇の森 名所也。

座頭谷 有馬にあり。

さ、やきの橋 北国に有り。

三途川・三途の橋 総州に有。

三盃水 総州に有り。頼朝公、水を乞給ふに、水涌出て旱にも乾く事なく、汲めどもあとより三盃づ、溜る故云。

十八女嶋 女護の嶋の事也。

伽羅稻荷 江戸に有り。

切支丹坂 江戸に有り。

奇楠山 和歌の浦に有り。

雪の浜 佐渡に有り。

三つ股 江戸に有。句に、三つまたくぐる月かかんしん。

耳香山 吉野山に有り。

耳なしの池 昔大和国に三人の男有て、かつら子と云女を

思へり。此女、何れに随わん事をわき兼て、み、なし池に身を投て死すと也。

都の不二 三上山也。江州に有り。

耳なし山 伊勢に有。

三つの浦 高津、敷津、難波津、此の三つを云。

祝言寺 江戸に有り。

紫蓋之嶺 唐に五岳とて、五つの山有り。其中に南岳を衡

山と云。此の山の嶺を紫蓋と名づく。天晴たる時は白鶴

一双、其上に翔ると荊州記に見たり。

白糸の浜 丹後天の橋立の浜也。

標茅原 下野の名所也。

紫雲庵 当麻、中將姫の庵室也。

獅子の窟 山城に有。龜山院御幸有りし事有。

白比丘尼 是は若狭の国、熊野山に神明有。其辺りに役の小角の像を安置して、脇立に白比丘尼、又八百比丘尼と云、十六の時の木像有り。昔此の辺に富者五人有て、時々

会して宝をくらべ慰むこと有り。食膳珍味を尽す。或る時、人魚を得て料理す。主を始五人は怪しき物とて不食。其の中に一人、珍しき物なれば、家に持て帰らんとて、懷して人魚の肉を持帰けるを、其の娘、此の肉をかくして、ひそかに食せしと也。是より長生して、八百の壽命をたもつと云り。其の者、入定の窟、同所酒井家の菩提所、建康山空印寺の寺中に此比丘の石碑有り。

しらぬひのつくし 景行天皇十八年五月に船に乗給しに、日暮て不知着岸（着岸を知らず）、遙に視火光（火光を視て）、則得着岸（着岸を得）。天皇、其火の処を問ひ給ふ。国人対曰、八代県也。其火の不得主（主を得ず）、非人火（人の火に非ず）とて、其国を火の国と云。今の肥前肥後、是也と。しらぬひのつくしと云たるものと也。

平川の番（江戸御城内也） 手を改る也。御城女中出入の時、手の裏に印判をして出す也。

びやうどい 平等院の略語也。京の東の洞院を、といと云ふ如し。

びやうぶ岩 有馬に有り。

火打の権現 山城に有。

非人観音 江戸に有。

諸越が原 総州に有名所也。盛切寺 飯沼と云所に有。しをり山 不二山也。

逃水 野に有事也。遠方より見れば、水の流る、如く見ゆれども、近くへよりて見れば、其形ち無し。仍て云。水気の立也。末無川とも云。

鼎湖 黄帝の御墓有る所也。黄帝は白龍の来て向へ奉りしかば、竜に乗て天に上り玉ひしに、近臣等なげきかなしみて、龍の足にとりつき、尾をとらへなどして、七十余人天へ上りしに、龍のひげにとりつきし二人、半天にのぼるほどに、ひげぬけて地に落けり。又黄帝の御弓を立て黄帝の墓とす云云。鼎湖と名づくることは、黄帝、首陽山の銅を取て、鼎を荆山の麓に鑄玉ひけり。かなへ、すでに成るとき、白龍の下て帝を迎へて去りぬ。此の故にかく云と也。

達摩湯 温泉の名也。

小町口 鎌倉にあり。八幡より光明寺へ行道、磔場の由。句に、盗人も俤かわる小町口。

江南 揚子江の南を云也。揚州の江都県の南、闊こと四十里云云。彼所は暖にて、冬も春の気色のやうにてあるとぞ。

菊の流 南陽の酈原に谷あり。其水、甚だ甘味也。其上の山に多く菊花あり。其華を洗て落る雫なるに依て、いみじき成べし。其流の末に三十余家の里あり。其里人、此の水を飲む故に、皆上寿の齡を得たりと云り。翹林文苑に有り。上寿とは百二十年を云。中―は八十也。下―は四十也。是、菊兒童が故事成べし。此の事を歌連歌には菊の測とつかふ也。歌に、我宿の菊の白露けふことにい

く世つもりて測と成らん。

喜見城 刀利天の都、帝釈の住居也。

舒姑泉 昔舒氏の女、音楽を好みき。薪取に行きて、やがて坐して動ずして泉となる。人、其泉のほとりにて絃歌すれば、泉涌流ると云り。宣成記に見たり。

ひなばりの国 我國の事也。

食国 すべて我國を云。

松が岡 京、比丘尼御所也。

羽織着た屋根 破れたる屋根へ菰杯当たるを云。

紫園 内裏を云。歌にも紫の庭と詠めり。

禿小屋 大坂御城内に有。禿の化物出るとぞ。

庭堪草 潦也。

鏡の神 大宰少貳が靈神也。

溜住居 江戸に有。世間の悪たれ者、多く集り居る所を云。

乞食小屋也。無藝のやくざ者、願人坊主杯也。

掃除波 六月廿一日、榎の嶋へ打浪也。

棹越しの川 大水出に、長竿に取付て川を渡るを云。外道波 六月廿八九日に極て立、大波也。遠州辺に有ると也。

#### 人倫并古事

一角仙人 天竺の波羅余国に一人の仙人あり。小便をしける時、鹿のつるみたるを見て姪欲の心をこりて、不覺して漏精したりける。其か、れる草の葉を女鹿なめて子をせず。形は人にして、額に一の角生ければ、是を一角仙人と云。或る時、此の一角、山路を行とて苔の滑なるにすべりて転ければ怒て、是雨露は龍王の業也とて、則世界の龍王を不殘封じこめて置し故、一天下久しく雨降る事なし。故に大に早魃して人民悉難義す。時の王、此のことを相士に尋玉ふに、是彼の仙人、龍を封じこめたるゆへ雨ふることなし。後の内、美女を一人、彼の草庵へ遣はされなば、姪欲にをほれて仙術の通力もうせて、龍も自由なるべし。其時、雨をも降らすべしと奏しければ、帝、其の儀に同じて后を一人、草庵へ送られし事在此と有り。

後の扇陀羅女、宮中を出て仙人の草庵へ行く時に、我一角が肩ぐるまに乗らずは、宮中へ二たびかへらじと云て出しと也。謀に、一角が庵の前の川上より酒を流しければ、それを呑み酔て後の容色にをばれて、仙人も后を

かたぐるまにのせて居たりしと也。故に通力うせて、龍も自由を得て雨を降らせしと也。

懿公 衛の国主也。鶴を寵愛して五位に成して、行くときも車にのせて共に御幸し玉ふ。国民、是を誦まもこと限無し。狄人をこつて衛の国を攻し時、国の人助け救はず、鶴こそは君を助け奉らめと云しと也。扱、終に狄に討れ玉ふ。多びす、懿公を殺、其肉を喰て、わづかに肝をぞ残しける。其臣、弘塩なんと云者、是を恥て其肝を取て、己が腹をさきて是を収て死けり。是を主辱はづかしめらるときは、臣死すと云なるべし。史記に出。句に、下官するい公が後の鶴太夫。

いろね 妹之事。

いろぬ 兄之事。

家童子 我女房を云。

魯婦 魯の国の女也。名に非ず。兄の子をいだし、我が子を捨たるもの也。魯の君より衣三十疋を貰たる人也。

母 と者、礼部韻に曰、母は乳也。慕ぼ也。嬰兒の所慕慕所。

易の坤を為母、從女字（母と為、女字に從ふ）。中に両点あり。蒼頡の篇に曰、其中の両点は象女乳（女乳に象）。古今韻会に曰、陸徳明が曰、母と与母不同（母と同じからず）、母は双女中二点、象兩乳之形（女中に二点を双て、兩乳の形を象る）。母は女の字の内に有一画（一画有り）。毛氏が曰、内の一画は象奸之形（奸之形に象る）。奸女を為母（母と為す）云云。

馬糞先生 儒者也。元は有徳の人成しが、弟に世を讓て、常に馬糞をかきて歩行ながら書をよみ玉ふ。故に此名の有。句に、賢人酒呑む馬糞先生。

初茄子 伏見撞木町の遊女。揚代は下直なれども、京へ呼には、かゝり物多き故、如此云り。初茄子も籠杯に掛り物有る故に高直に成る也。伏見の遊女を云。

馬聖 此も僧の事を云。馬は尺八を聞て余念なき物也。仍かく云。又牛琴馬笛とつゞく也。

梅花のよそほひ 宋の武帝の女、壽陽公主、昼寝をし玉いけるに、梅花、額の上へ落ちて見事也。是を梅花のよそほいと云。

白眼の友 悪敷友也。げんせきが古事也。

二毛のよはひ 昔、潘安仁と云し人、容ち世に勝れたりしが、晋の十四年の秋、年三十二に成しに、初て鬢に白髪二筋生たりしことを、秋興の賦に書たりしより、三十二を二毛のよはひと云。文選註に見たり。

錦鳥 媒の事を云。

牧童（左訓「うしごてい」） 牛を引童也。雲上の御車を守る牛飼には非ず。

順礼 順礼を云。皆棒を持者故、此異名有。

屁負比丘尼 比丘尼の供の小びく尼を云。となり男 業平の事也。

桃源 漢の代に武陵と云処の人、漁の為め舟に乗て江を上り行くに、江の水上に桃の木多く生て、花いみじく開。

其花のもとに、龍鱗の文、虎豹のまだらなる如くなる犬のあやしき声して、此の武陵の人にはへかゝる。さて、かの処を見れば、人の通るあと有り。怪くて舟をつなぎて、陸より尋ゆけば、男女二人居たり。家もなくて、あらはにして居たりける。此の漁人問、此の処はあとたへて鳥声だにもせず。公達、何人なればかくて居玉へると。答云、我は秦の難を去て、夫婦共に此の山に隠れたりき。今は八十余年に成ぬ。物不食（食はずして）十三年に成たりと云ければ、漁人哀みて食物を与へたりければ、云こと、よのつねの人の如し。彼を桃源の隠士と名くと云。桃源記にあり。

仲達 姓は司馬、名は懿、仲達は字也。此人は狼顧の相とて、狼の如くに身は不動（動かさず）して頭は自由に回しし也。魏の武帝（曹操）の臣也。武帝、狼顧相を見て氣遣せられたること、蒙求に見えたり。

劉訓 牛を黒牡丹と云古事あり。

驪山の神女 秦の始皇、驪山に昇りて神女と遊び玉いけるに、いかなることか有けん、神女こゝろゆかず思て、つばきを吐たりけるが、帝の御身にかゝり、瘡と成たりしかば、帝恐れて謝し玉いければ、神女、心とけて温泉を出し、あらひければ、瘡則い多ぬと云り。三秦記に見え

たり。

龍顔 漢の高祖は龍の子也。此の人、父をば大公と云き。母をば劉媪と云。其母、大沢の堤にひる寝をしたりしに、空俄に曇りて雲下たり。雷電せしかば、大公往て見ければ、劉媪の上に龍のとつぎけるを見たり。其後ほどなく懐妊して子を産む。其子の顔に龍の気色あり。高準とて鼻高にして鬢髻うるはしく、左のも、に七十二の黒子あり。力ら世の人に過ぎ、心至て賢かりき。名は劉季と云し也。高祖のおはせし所には、必其上に雲のたなびきしと也。又高祖の鼻高し、龍の如し。隆準と云。

又漢に三尺の斬蛇有て、四百年の基を發すと云諺有り。此斬蛇は、かんしやうばくやが打し三尺の劔を云。高祖、元は民中より出し人也。秦の始皇、驪山宮を作らる、時、国々より人夫を呼し也。此の時、高祖も人夫の奉行に成て都へ行く時、人夫を先きへ立て行しに、人夫かへりて、道に大なる蛇出て道に横たはりて行く道なし、是より帰り玉へと云けるを、高祖聞て、如此達者な者斗行くとて、何ぞ恐る、事なしとて、恐る、気色もなく進んで劔をぬき、大蛇をまん中より何の苦もなく切り玉ふ故、蛇二つに分れて死けると也。故に安々と道開けて通られしと也。跡より来れる日用の者共、追付て云やう、只今通る所に大蛇の切殺されたる有り。其の傍に一人の媪有て、夜る

泣く故に、何ゆへに哭すと問ふ。嫗対て曰、吾が子は白帝子也。化して成蛇（蛇と成り）道に出たるに、今赤帝子の為めに斬らる。故に泣くと云て、嫗忽に不見（見えず）。不思議の事也。嫗が高祖を赤帝子と云ふ時は、只人には非ず。高祖は神の化身なるべしと云しと也。赤帝子は南方を司る日の神也。白帝子は西方を司る神也。嫗は白帝子の母と見ゆる也。高祖、是を聞て、然らば我兼て身に龍の鱗生し。今の奇瑞を聞く時は、末には天下をも取るべしと頼もしく思はれしと也。是より謀叛の氣ざしをこりし也。故に其の頃の勇者共も此の事を伝へ聞て、段々に高祖に思ひ付て幕下に随しと也。夫より諸侯にむけて名を沛公と云。秦の始皇を亡して前漢の高祖と云し也。

るり君 光る源氏の弟也。

温公 常に丸き枕をして寝しと也。是は寝てもこけるやうにして、学文を勵し人と也。

小野篁 清原の夏野大臣の篁に成らんとて、艶書を作て自ら持て彼大臣の亭へ往きたりけるに、其とき大臣、只人にはあらずと知て、我が娘をば女御后に奉らんと思へども、この人あやしき相ある人なれば、可背（背くべき）にあらずとて篁に取りつ。其後一兩年もすぎて、大臣俄に失せ玉ひぬ。閻魔王宮に至て見れば、むこの篁宰相、執筆の臣にて居たり。あさましと思程に罪の沙汰どもあ

りけるに、露云ふ事もなかりける。大臣、など一と言葉はよきさまに申されざらんと恨思ふほどに、既に悪趣へ遣すべきに定めらる、時、篁卿申て云く、かれは金泥の大般若經を書て供養せんと云ふ宿願侍り。閻浮にかへさるべきにや侍らんと申す。げにもとて、かへさると思てよみがへる。其後、大臣かの經を急て供養せられけり。さて大臣、姫君に此の宰相、いかなる事か有と問玉ひければ、昼三時夜三時、ねむることなん侍ると答ければ、それしかあらん、彼れは閻魔王宮の執筆の臣にてありしぞとのたまひけり。かくて篁卿、車に乗て愛宕寺の内へ入玉ひぬ。塔のほとりにて、車ながら地の底へ入にけり。其後ながく見えずとぞ。其跡、今の東山六道と云所となん。

粥能喰 かゆようぐ 細川幽齋公の茶坊主の名也。

椽能掃 えんようほう 右に同。

がらん神 あれる神のこと也。人にも用ゆ。句に、又酔ふて抜く裏店のがらん神。

かた糸鳥 蘇武が事。

猿源治 鰯類の魚売し者也。嶋原にて似せ大尽に成て、女

郎を買、床入して寝言に、いわしこんくと呼たる由。

更羸 かうい 此の人、虚発とて、虚空に矢をはなちて鳥を射ることを得たり。折しも王の前にて雁の東より西に過る声を

聞て、虚発して射落しけり。

かよふ浮木 是は漢の武帝、張騫と云方士に、天の川の水  
上を見せに遣されければ、浮木に乗て天の川に至り、織  
女に逢ひて、しるしを請ふに、織女、はた物の石をあた  
へたり。持てかへりて武帝に奏す。帝信ぜずして庭上に  
捨をかれたり。東方朔が見て云く、如何なれば織女のは  
た物の石は爰に来れるぞと云に、帝是に信じ玉ふとぞ。  
東方朔は破軍星の精にて、在世の内、天ノ一宿かけたり。  
死して後、天上にかへりけるや、又其の一宿、明か成し  
と也。

かりわらは 山臥を云。からわらはとも。

鹿嶋姥 取揚姥也。

大実坊 西行法師の事。円位上人とも号。

奪衣婆 三途川の姥也。

笋姥 江戸堺町、歌舞妓子を抱へて金を借しける也。

橘隆庵 名医也。片腕切落されても療治せし人也。

蒼頡 文字を作し人。眼四つ有しとぞ。

鶴比丘尼 おつると云比丘尼也。

津打九平次 狂言の作者也。

猫先生 江戸の人。儒者也。猫を多く飼て愛せし人とぞ。

なら茶坊主 異人也。道人也。異形にして乞食に似たる者

也。

藍喬 常に笛を吹、詩を賦したる仙人也。肆に出て酒を呑  
むこと、一度に七八斗也。身の軽き事、足の下に紙數十

枚置て、一枚づ、拽しむるに、一つも破る、ことなかり  
しと也。

紫の雲 后の事也。

虚暮々 馬鹿の事。

くろがも 中間共を云。大名衆の中間也。紺の物をきる故

也。

縮柳 唐にて人に別る、時は、柳をむすんで別る、也。巴

水橋にて五柳先生、人に別る、ときの古事なり。日本に  
ては、別れに節分の大豆を喰せて立する也。

山男 山に出る化物也。

擊甕 司馬温公の古事也。

李衛公 此の人、道に迷て離宮に宿りしかば、龍の雨を降

らすることを頼て、小きつぼと馬とを渡し、馬に乗て、  
何処にても此の馬のをどりいな、く処にて、瓶の水を一

滴づ、落せ。かまへて多く落すなど教しかば、李衛、心

得たりとて行時に、我故郷の上を通るとき、日でりなき

の為にとて、三十滴余り落す。此水一滴が、地上にては

三尺に成る故に、故郷は大水出て、平地に水三丈程あり

しと也。私すれば、かへつて害と成たとへ也。

髮少 髮、斑に生へたる女を云。見苦しき也。

斧柯 王質の古事有。

巨靈人 虎を愛せし大力也。山をも引くずしたる人也。或  
る句に、月の入る山に昔の人もがな。

児玉貞庵 医者也。句に、百俵を堀る貞庵が鉞。加賀様に手柄在て、百俵下されしと也。若殿御病氣の時、木にて鉞を作り、庭へ毎日出て地をほらせた也。木の葉医者 はやらぬやぶ医者を云。

江士清 此人、月のあかき夜は屋上に出、月の光を以て書をよみ、月かたむけば、光を追て終夜、文をよみし人也。文選の註に出たり。

小松姥 取揚姥也。

燕丹 燕王の太子也。名は丹也。秦国へ人質にとられて有けるが、秦王なさけなかりければ、燕の国へかへし玉へと云ければ、秦王あざけりて、烏の頭白く成り、馬に角生たらん時、汝をゆるしかへさんと云ければ、太子、天に仰ぎて曰、天、我が心を察せよ。地に伏て歎て曰、地、我が心を推せよと云ければ、頭の白き烏飛来て、秦王の殿の上に居たり。又額に角生たる馬、宮中に走り来れり。秦王、大に驚て、丹をかへす。史記に見たり。

趙遁鉞倪 趙遁と云者、晋の靈公をふかく諫ければ、靈公安からず思て、鉞倪と云力士を遣して、遁を殺さんとしけり。倪、彼れが家に至て見れば、遁、夜深く起きて装束して居たり。夜の明るを待て、主の朝にまいらんと思へる気色也。倪、是を見て思へらく、若し遁を殺さば不忠也。かれが志に我まさるべきに非ず。若し又殺さずは

自ら君命を背きなんとす。不如(如かず)、吾命を捨んにはと云て頭を槐木にふれて死けり。史記に見たり。丁令威 仙術を得て去りし後、鶴と成て花亭にかゝり、華表の上に居て、丁令威、家を去ること千年にして今還り来ると鳴けりと、神仙伝に見。

伝内 獸に藝を付し人也。

あかゞり惣八 東照宮より下されたる名にて、代々名主、今に江戸にあり。句に、惣八があかゞり天下道具なり。

赤子坊主 臍に赤子の形ち成る物有る、生れそこなひの人也。

三屋の馬鹿 たゞき金を持てかけまはる者也。足早成ることに喩る道具也。ありく事、極て早足なり。

佐々木姥 取揚姥也。句に、腹帯をめる指図も佐々木姥。

笹の才藏 戦場にて首を取て、口の中へ笹を入をきし人也。それゆへかく云。福嶋太夫の家臣也。武勇也。

魏文帝 限りなく馬を愛し玉ひけり。御狩に出んとて、馬をひき立、朱建平と云者に、此馬、相せよと仰られければ、打見て、いみじき御馬にては侍れども、只今死する相こそ侍れと申ければ、帝、何ゆへにか唯今死なんとて、誠しく思し玉はず。則馬に乗らんとし玉ふに、御衣の香しきに馬驚きけん、帝の御膝を喰ひければ、帝怒て釵をぬきて指し殺し玉ひけり。魏略に見えたり。橋中の仙 昔、巴邛と云所の庭に大なる橋の木有り。霜の

後、橘実を悉く取納けるに、其中に、たとへば三四斗も入りぬべき器程なる橘二つ有り。余り見事也とて残し置ける。或る時、人を木にのぼせ、此二つの橘を取らせ見るに、重きことは常の橘の如し。割て開きて見れば、各二人の叟有、相對して象棋。身一尺余り、かたり笑て自若とやすらか也。誠に橘中の楽み、商山にをとらず。但し根を深くし、蒂(左訓「へた」)を固くすることを得ずと云り。是は橘中に居て楽むことは術を得たれども、橘をもぎとらるゝこと、せん方なしと云へる心也。一人の叟の云、僕ことに飢虚、龍眼脯と云ふ物を食んとて、袖の中より一つの草の根を抽出し、皆是をけづり食す。食し訖て口をすゝいで吐けば、此草のかみしきたるが、忽ち化して龍となる。四人共に龍に乗て行しとぞ。是、商山の四皓也。

蓑衣笠之助 代々代官也。上より被下たる名也。東照宮より下されたる也。句に、かくるゝ字なし笠のすがみの。仁公子 釣を好んで糸二筋、竿に付け、両の魚を釣し人。宿那 首手足、二人前有し人也。句に、色の宿那をみたり類ずり。

白雪の曲 師曠と云人、四月のころ、琴を弾くに白雪の曲をひきければ、天、大にくもり、雪ふりまがひ、琴の上

に飛びけると也。干鱈先生 大儒也。常住の食事に干鱈を好んで喰ふ故、此

の名有り。

せこ 夫の事也。背子と云。我せこが来べき宵也さ、がにのくものふるまひかねてしるしも。

せな 右に同じ。

甯越 と云し人、年三十に成るまで自ら耕しなどして、いたみくるしめり。いかでか此の苦みをまぬかれんと云ければ、人語て曰、学する事、三十年にしてぞまぬかれん。然れども、君は齡闌たり。学すとも得じと云ければ、甯が曰、他人食すとも吾は不食(食せず)、他人寝るとも吾は不寝(寝ず)と云て、以夜繼日(夜を以て日に継ぎ)、積十五年(十五年を積て)以て当三十年(三十年に当ん)と云て、寢食を忘て学びければ、七年と云に、六箇国の刺史とて国守になり、後には周の武王の師と成にけり。春秋列伝に見えたり。

尚齒会 是は齡を貴ぶ事也。七人の老翁をならべて敬ふ也。官位種姓の貴賤をも云はず、只年の高きを上に居へ、先に立て敬ふ也。此会、唐家より起て此の朝に伝はれり。摸稜の手 新唐書列伝二十九、蘇味道が伝に曰、味道為相(相と為る)云々、嘗て語人(人に語りて)曰、決事不

欲明白(事を決するに明白ならんことを欲せず)、誤則有悔、摸稜持兩端(両端を持して)可也。世に号蘇摸稜(蘇の摸稜と号す)。

扱、摸稜とは、かどをひねると読む。物の四角なる角

をさぐるを、一となでに両方へ手がかゝるぞ。どちへもつかぬ事を云。蘇味道、公事訴訟を聞くに、一方に斗り理を不付(付けず)、両方を兼て定たり。是を摸稜の手と云。

童胤 男子八歳の異名也。胤は齒がわりと訓む。男子は八歳にて齒かわるもの也。

馬鹿 をんぢいともつかふ。

居喰上戸 酒を呑て頭をたゝくを云。能の狂言に、あたまをたゝく狂言あり。居喰と云狂言也。是より出たる名也。

弓取上戸 爛鍋ノ絃へ手をかける故、此名有。

鮫人 と云て、水中に住む者あり。又、洩客とも云。水中より出て人家にやどれり。日を重ねて、うす物の最いみじきを織て、市に出して売せたり。さて別る、時、主に器を乞て、泣て珠を出して盤にみちて、あたへたると云こと、博物志にあり。

釜譜代 久しき譜代者のこと。男女に不限。

寛闊 今云処の奴也。

あは、の三太郎 たはけをつくす者を云。

青き鳥 使を云。青鳥飛来ると云り。

丘 孔子の名也。頂のなかくぼ成ること、尼丘山のやうにをわしければ、しか名付ると也。

もさ引 宿引也。もさは田舎者の事。

先生 礼記曲礼に鄭氏が註に曰、先生は老人の教学(学を

教る)者也。孔穎が疏に曰、先生は師也。謂師為先生(師を謂て先生と為るは)、言心は彼れ先己而生其徳多厚(己に先んじて其徳を生る、厚きこと多き)也矣。古今名喩第二に、論先生為先醒義(先生を先醒と為る義を論ず)。

金堀(掘) 金堀を云。

青眼の友 能き友の事也。晋の七賢の中、げんせきが古事

也。

簀垣上戸 大上戸を云。何ほど酒を呑ても腹にたまらず、下へぬける歟との下た心にて云也。

安宅 あんご日雇とて、歩行にてやとわれる者を云。又安

居の御法と云ことあり。是を取合て云たる。句に、日雇の安宅御法不存。

麻福田丸 南都元興寺の智光法師の事也。元は河内の国に

ある豪家の門前の卑民の子也。或る大家の姫を恋けるが、便りもなく、其母、麻福田が文を持ち行きて姫に渡すこと折々なり。姫の曰、我を恋しと思はゞ、先づ手習杯を能くし、其の上、学文をはげむべしと云やりければ、実もとて手跡学問に心を尽しける也。其後、出家せよとす、めける故、法師に成て修行に出んとす。此の時、彼姫葛袴を送て、歌を添てやりける。

麻福田が修行に出し玉は、き その片褌かたもをば我ぞぬひ  
てき

一説に、玉は、きを藤袴と云説有り。其後、修行の道に  
て姫の死たることを聞て、益修学をはげみし故に、名を  
拳南都号智光法師(南都に挙げ智光法師と号す)。或る時、  
此僧、夢中に浄土に至る。覺て後、化童來現して、智光  
所見(見る所の) 浄土を画図にあらはして世に存す。智  
光の曼陀羅、是也。和朝三曼陀羅の随一也。智光終焉の砌、  
聖衆現前(四字、豎点を右傍記) して正念往生す。此の  
時門葉等、行基菩薩を招て為唱導師(唱導師と為す) 云  
云。時に行基、高座の上にて彼の姫の詠歌を吟じ、人に  
見せ玉いしと也。故に世に此の行基は、彼の姫、変成男  
有て、行基と化したるかと云説有り。

をなみ 女の異名也。

池田湯谷 本名を侍従と云。湯谷は母の長が名也。

若き女を をんなと訓ず。

五十以上の女を をうなと訓ず。

刀負 惣而老女の惣名也。妓王妓女が母の名斗に非ず。

斎田七兵衛 水木辰之助、後に侍に成たる時の名也。

鼻平太 平の清盛、若き時、未だ北面之時、常に高足駄を  
はきて歩行し故、京童共、高平太と呼し也。是をいやが

りて扇を鼻へ当て歩行ければ、又それを鼻平太と呼しと  
也。

真壁平四郎 奥州之者也。或る時、主人に木履にてた、か  
れたり。是を遺恨に思ひて、発心して修学怠らざりしか  
ば、博学と成て仏心和尚と云。其後、奥州(数文字空白)  
の住職に、彼の主人より招請せられて行しと也。彼のた、  
かれたる木履の齒を、錦の袋に入れて持行きしと也。  
関四郎 去る関白の御子也。男伊達だてを好み玉いし人也。故  
に関四郎と呼し也。松平紀伊守殿の諸司代の時分也。

#### 支躰

癩は谷 貞にある、そばかわの事也。

挑灯頭 惣髮の事。四方がみと云心。

離魂病 二人に見ゆる病也。

かつら髭 おもづら髭也。かつらを掛たる様はるに生也。

\*この記事は『匠材集』を引く。

柘榴鼻 赤き鼻を云。病に有。

蛇皮面 疱瘡のひきつりたる也。疱瘡あばた顔とも用。

夕顔頭 揚げあたまのこと也。

如來手 碁をうつ時の手つきを云。

点眉ちまゆ 天上人の眉の上に●、如是成物を云。

とこの海 涙也。  
籠耳 物を聞て終忘る、也。

俵指 （なほゆび） 指に俵の如き筋有を云。俵筋とも。

意馬 心のこと也。

鐘おとがい おとがいの長きを云。

半月 （ひたひ） 男女の姪門、一人にそなへたる者を云。句に、横に  
なるのは半月が川流れ。

天竺肌 左の方の肌をぬぐこと也。

小豆疱瘡 いもの跡の赤く見ゆるを云。

早苗髪 （さなへ） 後家の切し髪のこと。

明礬泪 （めうばん） めうばんを目にぬりて泪を出すを云。

とこの海 泪也。

三敷の印 （みふ） 手を如此したるを云（掌の中央を少しふくらま  
せて両手を合わせた形を真上から見た絵）。

（しおむら こう）